

誌上 ケース検討会

全国各地で行われている事例検討会の模様を誌上で再現します。
検討会及び事例の内容は、プライバシー保護の観点から、
全体の主旨に差し支えない範囲で変更させていただきました。

●スーパーバイザー 対人援助職トレーナー
奥川幸子 *Okugawa Sachiko*

87

視覚障害をもつ夫と 認知症の妻の生活支援を考える

●事例提出者

Wさん

(居宅介護支援事業所・社会福祉士)

W

◆提出理由

あまり話をしてくれない、本音がわからない利用者Gさん。視覚障害はあるものの司令塔的存在である夫に気を使っている様子も見られ、それでも担当年数を重ねていくうちに、少しは話してくれるようにはなったが、やはりうわべだけのよう感じられる。さらに、夫の入院に伴い、突然あらわれた親族（義妹夫妻）が、さまざまな行動を起こしてくる。その行動が果たしてGさんの思いと合っているのだろうか。今まで「Gさんご夫妻のために」と3年近く担当をしてきたが、ケアマネジャーとして本人の本音をどのように汲みとれるのか、どこまでやればよいのか、すっかり方向を見失ってしまった。

このようなケースに今後どのように対応していくべきか、ケアマネジャーとしてどれをどこまでやっていけばよいのか……。もう一度自身で考えてみたいと思い、事例提出した。

●クライアント

Gさん（83歳・女性）

G

◆紹介経路

H16年5月、前任のケアマネジャーが退職するにあたり、Gさんの夫の担当となる。しだいに妻のGさん自身に短期記憶低下などの認知症状が出現しはじめ、17年3月に介護保険申請を行う。要介護1となり、正式に契約を交わす。

◆クライアントのプロフィール

病状：診断名は不明。高血圧、骨粗鬆症、認知症の治療薬を服薬。胃腸が弱く、下痢をよくおこす。

現在の状態：歩行はふらつきがあるが、杖等の使用はなし。入浴は促しがないと入らない。IADLは、自発性低くヘルパーのサポートが必要。体力がなく、いつも横になって過ごしている。

家族構成：夫と2人暮らし。子どもはいない。

生活歴：裕福な家庭に育った様子。今の夫とは再婚。経緯の詳細は不明だが、前夫は会社の経営者だった模様。Gさんはその話題には触れたくない様子。今の夫とは、再婚同士。

経済状況・住宅状況：現在住んでいる土地は、本人名義（建物は夫名義）。その他、預金・株券などかなりの額の資産がある様子。本人の母親が亡くなったとき、きょうだい間（遠方に住み、ふだ

んの付き合いはまったくない弟が一人いる)での遺産分けは済んでいるとのこと。住まいは閑静な住宅街。二階建ての一戸建て。庭も広い。

◆支援経過

H16.5.20 初回訪問。担当ケアマネの退職にあたり、同行訪問。Gさんに初めてお会いする。視覚障害がある夫の隣に正座しておられる。担当変更のご挨拶をさせていただく。

Gさん「主人は目が見えないので、私が目の代わりをしています。今のところ、私がいろいろとできるので、そんなにヘルパーさんは来なくて大丈夫です」

ヘルパーからの情報では、夫の家事援助に入っているものの、調理をしていると常にGさんが横にくっついて、あれこれと指示を出してくること。台所をヘルパーに勝手にいじられるのがとても嫌なよう。しかし、ヘルパーが調理する以外にGさんが作ることはほとんどないとのこと。常にお二人とも体調がよくないようで、下痢・嘔吐など多い。

ケアマネジャーの第一印象：プライドの高そうな人。夫の目の代わりをしている、私がいなければこの人は何もできない、といった自負があるように感じられた。

以後、H17年3月頃まで、夫の介護保険でのヘルパー派遣(H14年より開始)を継続。その間、Gさんの状態は低下傾向にある(直前のことを忘れてしまう。腐敗した食品を食べている。転倒が多いなど)。

ヘルパーからの情報では、冷蔵庫内に腐敗した食品が多数あり、ヘルパー派遣のない日にそれを夫と共に食べている様子。ヘルパーが片づけたくても、Gさんが冷蔵庫内をさわらせない。

H17.3.13 訪問。冷蔵庫内の食材についてお話しする。夫は「自分は見えないから妻に任せているので、妻と話してください」とのこと。Gさんとお話しする。

W「冷蔵庫の中の食べもののことなんですけど」

Gさん「はい……(下を向き表情が固くなる)」

W「ヘルパーさんが入ったときにGさんと一緒に冷蔵庫の整理をさせていただきたいんです。少し古いものもあつたりして、間違えて食べたりしますと、身体にも悪いし」

Gさん「……(うつむいたまま)」

W(少し間をおいて)「いかがでしょうか?」

Gさん「……でも、私は古い人間ですので、何でも簡単に捨てることはできないんです。物のない時代を生きてきましたから……(うつむき加減)」

いろいろな角度から話を続け、ようやく「少しずつならば」との返事をいただく。

3.28 訪問。事前に訪問介護事業所から、27日より夫妻に嘔吐・下痢ありとの報告がある。Gさん自身の介護保険の申請についてお話しする。

「私には必要ないです」との発言が続くが、体調不良時にはサポートが必要と説明、また夫からもその必要性を話してもらい、ようやく納得。代行申請を依頼される。

申請の結果、認定は要介護1となる。Gさんの希望により、サービス内容は変更せず。

8.25 通院同行。医師より、本人の状態を考えると、1回/2週の通院は継続してほしい。通院は一人では難しい状況となっているようなので、ヘルパーについてもらうよう助言あり。薬はきちんと飲むようにとの指示もあり。

道中、Gさんとお話をする。

「ご主人と二人での生活で心配なことはありますか?」と、世間話の合間に何気なくうかがうと、それまでわりと穏やかだったが、急に硬い表情となり、「……いえ……別にないです」との返事。

W「もし、お二人に何かあったとき、すぐに来てくれる人はいますか?」**Gさん**「……いません」

W「(ご主人の)娘さんのBさんは、何かあったとき来てくれそうですかねえ……」**Gさん**「(きっぱりとした口調で)あの人は私の生んだ子でな

いので、あてにはしてません。現金をまかせてたら持っていかれてしまうから」

夫は以前から、「何かあったら娘がいるから大丈夫」と言っていたが、妻のGさんにはその気持ちはないようだ。

その後、1年ほど2週に1回、ヘルパーの通院介助を継続。ヘルパーの訪問のない日に冷蔵庫内の腐敗した食品を食べ、夫婦で下痢と嘔吐をするなどの状況は続く。

6.22 訪問。今まで夫の指示を受け、Gさんが買い物やその他の用事を済ませてきていたが、最近Gさん自身が、外に出るのが大変になってきており、買い物すらできていない日が多くなっている。現在、3回/週のヘルパー派遣だが、だんだん足りなくなってきた。ヘルパー派遣を増やすことについて二人に相談する。夫は「そうしてほしい」とすぐに返答したが、Gさんはじつと下を向いたまま。**Gさん**「……私ができます。これ以上、ヘルパーさんが来ても気をつけてしまうだけで。夫の食事を作るくらい、私にもできますし。そんな、たくさん作るわけでもないし」。すると、その横で「そんなこと言って、できてないだろ。手伝ってもらったっていいじゃないか」と夫。それを聞き、うつむき加減で、「わかりました……」とGさん。日曜日を除く毎日、ヘルパー派遣を実施することになる。

ヘルパーが入り始めると、拒否的な様子はなく、調子のよい日は一緒に台所に立つなどする。

11.4 訪問介護事業所より報告(電話)。夫が緊急入院したとのこと。夫の娘さんから「連絡がとれない」と知らせを受けた近隣市に暮らす夫の妹Jさんが急行。夫は室内で倒れており、そのときGさんは別室にいて状況が把握できていなかった模様。救急車にて病院へ搬送。

連絡先を聞き、Jさんに連絡し、現状を確認。原因など詳細は不明。7日にGさんの自宅においてお会いする約束をする。とりあえず5日よりGさんの安否確認・食事の確保が必要となるため、

緊急で3回/日のヘルパー派遣を開始。

11.7 訪問。Jさん、夫の娘Bさんにお会いする。現状について確認。ヘルパー援助については、増やした状態で続行することになる。金銭管理について、地域福祉権利擁護事業と成年後見制度に関する情報を提供。Gさんも同席していたが、いつも以上に言葉少なくうつむいている。

その後、Jさん夫妻がGさんの自宅の改修や家電品の処分、買い替えなどを積極的に言い始める。Jさん夫妻によれば、「入院中の夫より頼まれた」とのこと。しかし、あまりに急激に片づけを行っているため、Gさんの混乱も見られる。Jさん夫妻には、認知症についてお話ししているが、どの程度の理解を得られているかは不明。また、Gさん自身、一人でいる時間が長く外出機会もないため、デイサービスを検討しはじめる。

12.5 訪問。Gさん、Jさんにお会いする。夫の在宅復帰は未定なため、しばらく現在の生活が続いていくと思われることを確認。デイサービスについてお話しする。Gさんは最初「そんなところには行きたくないです」とのことだったが、いろいろと説明をすると、「あなたがそこまで言うなら」と見学をすることになる。

夫のことをJさんに尋ねると、「あー、あんまりよくないのよ。もう家には帰さないつもり。だって、面倒みれないでしょー」。Gさんは、その話をうつむいて聞いている。

12.9 デイの見学へ同行。道中、今後の生活についてGさんのお気持ちを聞く。「また、あの家で夫と一緒に暮らしたいんです」とGさん。Gさんとしては、今の自宅は自身の両親が残してくれた家なので、手放したくないと思っているし、そこに住み続けたいとも思っている。しかし、Jさん夫妻は、夫と話をし、ご夫妻での施設入所も検討している様子である。

その後、ヘルパー経由で、ご主人が病院から退院後、有料老人ホームに入られたと聞く。その件でJさんからの連絡はない。

◆考察

かかわり始めの時期、Gさん夫妻に対しどのようにサポートしていくべきかを考えながらも、他者の介入を嫌う夫妻を前に、一歩引いていたと思う。その気持ちが、さまざまなアプローチを遅らせ、結局タイミングをつかめないまま、急展開を迎えてしまったような気がする。

認知症があり、本意がつかめず二面性がある利用者に対し、利用者本意のサポートをしていきたいと思っていた。しかし、考えに相違がある親族に対し苦手意識が出て、結局押し切られるかたちになり、何もできないままとなってしまった。

また、「Gさんを守りたい」との個人的な気持ちが表に出すぎた感もあつたかもしれない。

ケース検討会

検討課題を設定する

奥川 ありがとうございます。では、最初に今日の課題設定をしましょう。考察に「他者の介入を嫌う夫妻を前に、一歩引いていたと思う」とありますが、これはどういう意味ですか？

Wさん 金銭管理ができていなかったり、腐ったものを食べていつも下痢をしているなど、よくない状況が見えていたにもかかわらず、適切なサポートを入れられなかったということです。

奥川 それは何に起因していると思いますか？

Wさん ご本人のサービス拒否が強かったのが一番です。

奥川 認知症のクライアントが「嫌だ」と言うことに対して、なかなか突破できなかったということですね。

Wさん はい。

奥川 では、どうすればGさんの拒否を突破することができたのかをテーマにしましょうか。

Wさん はい。よろしく願います。

奥川 また、考察では「本意がつかめず二面性がある利用者」という表現がありますが、これはどういう意味ですか？

Wさん 二面性という言葉は適切ではないかもしれませんが、たとえばヘルパーには親戚のJさん

のことを「あの人は信用できない」と言い、Jさんに対しては、「ヘルパーが信用できない」と言ったりして、本当はどう思っているのかがつかみにくいところがあります。

奥川 ご本人の本当の思いはいったい何なのか、ということですか？

Wさん はい、そうです。

奥川 では、その点を2つめのテーマにしましょう。もう一点、「『Gさんを守りたい』との個人的な気持ちが表に出すぎた」というのはどういう意味ですか？

Wさん 親戚のJさんが動いてくれてはいたのですが、私の目には「Gさんにはお金がある」ということが大前提になっているように見えたので、なんとかしてGさんを守らなくては、という気持ちが強かったのです。

奥川 Jさんがどんな考えでGさんのお世話をしていたらっしゃるのかは確認しましたか？

Wさん いいえ、聞いていません。……聞くべきだったかもしれませぬ。

奥川 いつ聞くことができたでしょう？

Wさん う～ん、ちょっと今はわかりません。

奥川 では、GさんにとってJさんはどういう存在で、いつJさんたちのスタンスを確認できたかを検証していきましょうか。

Wさん はい。ぜひお願いします。

奥川 わかりました。では、今日はその3点を課題にして進めていきたいと思います。まずは、Gさん夫妻とWさんがどのような状況に置かれていたのかを明らかにするための情報を共有していきましょう。先ほどの報告のほかに、どんな情報があるといいでしょう。質問をお願いします。

利用者情報を共有する

発言 Gさんご夫婦はいつ結婚されたのですか？

Wさん 具体的な結婚年数は聞いていません。

発言 ご主人はどんなお仕事をされていたのでしょうか。また、Gさんご自身はお仕事をされたことがあるのでしょうか？

Wさん ご主人は視覚障害があることから、病院で按摩さんの仕事をしていらっしゃいました。Gさんご自身は就業歴はありません。

発言 Gさんはお若い頃、どんな生活をしていらっしゃったのか、性格面などもわかるようであれば教えてください。

Wさん 実はGさんは、若い頃の話はかたくななまでにしてくださいませ。唯一お話があったのは、今住んでいる家はずっとGさんのご両親がお住まいだったということと、前の結婚相手は会社の社長さんだったという2点です。

発言 Gさんご夫妻はとても資産があるようですが、実際の収入はどのくらいあるのですか。

Wさん お金をたくさん持っていらっしゃることはわかっていましたので、収入についてははっきり聞いたことはありません。今お住まいの土地、建物のほか、現金もかなりあるようです。前任者も年収などの情報は把握していませんでした。

奥川 経済的な基盤は援助のスタート時でないとい意外に聞きにくいものです。ただ、経済的な基盤は大事な情報ですし、後からでも聞くことはできます。どんなときにチャンスがありますか？

発言 サービス量を増やすときでしょうか。

奥川 そうですね。今回は18年11月4日に緊急対応でパッとサービスを増やしましたね。

Wさん そうなんです。先ほどからずっと考えていたのですが、本当はここで緊急対応をした後にきちんとした話し合いをもたなければいけなかったと思います。

奥川 大切なところに気づきましたね。3つめの課題ですね。11月4日にご主人が倒れて、すぐに1日3回サービスを入れるという緊急対応はできました。ここで仕切り直しの再アセスメントができましたね。このとき何を確認すればよかったかは、また後で考えましょう。もう少しGさん夫妻の状況を浮き彫りにする質問をお願いします。

Gさんの「プライド」をめぐって

発言 Gさんがヘルパーを断っていたのは、どういう理由からだったのでしょうか。

Wさん ずっと専業主婦をしていたことが大きかったと思います。特に台所に他人が入ってくることはお好きではありませんでした。

奥川 それはどうしてでしょうか。

Wさん 台所は自分のテリトリーだと思っている、からでしょうか。

奥川 どうして自分のテリトリーが大事なのでしょう。

Wさん う〜ん……。

奥川 Gさんはずっと、「ヘルパーは要りません。私はできます」と言っていますよね。これはどういうことでしょうか。

Wさん ご主人の世話をするのは自分の役割だと思っている――。

奥川 それがGさんのアイデンティティなんですよ。

Wさん ご主人のことは自分がやるんだという気持ち……。

奥川 そう。Gさんの話には「目の代わり」という言葉がたくさん出てきますよね。これは 키워

ードです。Wさんはどうとらえていましたか？

Wさん そういうふうにご自分の役割を認識していらっしゃるんだな、とはずっと感じていました。

奥川 そこにプライドをもっているということですよ。

Wさん はい。

奥川 つまり、Gさんは「プライドが高い人」ではなく、「ご主人の目の代わりをすることにプライドをもっている人」なのではないですか？

Wさん なるほど——。たしかにそちらの表現のほうがふさわしいと思います。

奥川 事例にもそういうふうにと書くと、Gさんの印象がだいぶ違いますよね。表現は怖いですが、気をつけましょうね。

Wさん わかりました。

クライアントの「自己評価」について

発言 今の話に関連するのですが、奥さんは家事援助は必要ないと言っていました、どのようにしてサービスの導入に至ったのでしょうか。

奥川 いいところに着眼しましたね。

Wさん 奥さんは嫌だと言っている、ご主人が「自分には必要だ」とおっしゃったからです。

奥川 その経緯を丁寧に確認すると、何が浮き彫りになってきますか？

Wさん う〜ん……Gさんが自分でできる部分とできない部分、でしょうか。

奥川 そうですね。奥様がすべてできるのなら、夫にヘルパーが入る必要はないはずですが、実際には入っていた。ご本人は「できる」とこれだけ言うのですから、きっと以前はできていたのでしょうか。では、いつごろから、どんなところに陰りが出てきたのか。ここをしっかりと確認し、共有することがすごく大事です。ご本人はすべてできている状態、不本意なままヘルパーが入っているとしたら、自尊心は傷つけられま

す。平成14年からヘルパーが入っていたということは、Wさんが引き継いだときは、もしかすると奥様の自尊心はズタズタだったかもしれません。前任者から引き継いだときに、こういう予測がこちら側にあると、16年5月20日の初回訪問のときの対応が変わってきます。奥様が「私が目の代わりをしているんです」と言ったときが実は一番肝心なんです。奥様がこう言ったとき、どう対応すれば信頼関係がつけられるでしょう。

発言 奥様のやっていることを認める。

奥川 そうですね。「奥様は今もご主人のことを気にかけているんですよ。それで横について、あれこれとご主人のお体のことを気遣っていらっしゃるんですね」と言えますよね。奥様は実際にそういう気持ちでやっているのですから、決してお世辞ではありません。

Wさん そういう言葉はまったく思いつきませんでした。

奥川 同じ考え方でいくと、17年3月13日の対応も変わってきます。「自分は見えないから妻に任せているので、妻と話してください」と夫が言います。そこで「冷蔵庫の中の食べ物のことなんですけれども」と、遠慮気味ではあるのですが、単刀直入に尋ねています。この言葉の前に何が必要だったでしょう。

Wさん 「お食事はとれていますか？」とか……。

奥川 その前に一言、「ご主人はGさんが頼りのようですね」と入れられますよね。

Wさん なるほど。その言葉があると、Gさんの自己評価が上がりますね。

奥川 そう。「だからGさん、ご主人はあなたのことを頼りにされていますから、これからお食事のことについて一緒にご相談させてくださいね」と導入すれば、どうでしょう。

Wさん そういう話の進め方であれば、Gさんも応えてくださったと思います。

奥川 実際問題としてはできていないのですが、そこを「できていないから」と入ってしまうと、

クライアントを傷つけてしまいます。これは事例検討を行うたびに思うことなのですが、ケアマネジャーの皆さんは言葉を惜しみすぎるところがあります。ちょっとした一言を挟むことで、少しずつでも自己評価を上げることができるんです。ケアマネジャーが会うクライアントは、ただでさえ生活機能が落ち、周囲からは「できない」と言われ続けて自己評価が下がっている場合が多いのです。しかもケアマネジャーが話す用件というのは、クライアントにとっては「できていない」ことが多いわけですから、用件に入る前に自己評価を上げる、そのことを留意してみてください。

Wさん わかりました。これから気をつけたいと思います。

Gさんの「本音」は何か

奥川 では、ここで先ほど宿題にしておいた18年11月7日の仕切り直しについて考えていきましょう。ここが仕切り直しのチャンスだったとWさんは気づいています。では、ここでは何をすればよかったでしょう。

Wさん これからの奥さんをどうみていくか、Jさんや娘のBさんたちときちんと詰めること。

奥川 そうですね。それまで、かろうじて二人で生活できていたのはご主人が司令塔をしていたからですが、そのご主人が倒れてしまった。そこで急遽、Gさんの命と生活の安全を守るように社会資源レベルでは対応した。では、これから先、どのようにGさんを支えていくのか。ご主人に代わるキーパーソンを11月7日の時点ではどう考えていましたか？

Wさん この時点では、娘さんはほとんど話に加わっていなかったのので、私はJさんかなと思ひ、Gさんの今後についてどう思っているか、Jさんにかかってみました。

奥川 そうしたら？

Wさん 「まだ倒れたばかりなのでわからない」

と返されてしまいました。

奥川 突然の出来事ですから、周囲の人は当然パニックになります。そういうとき、ケアマネジャーはまず何をする必要がありますでしょうか。

Wさん そこでは、一応、現在の状況とこれまでの生活、また、近い将来にどんなことが起こりうるかをお話ししました。すると、家族としては、「全然時間がない」ということでした。「基本的には当てにしないでくれ」と言われました。

奥川 ということは、「全部サービスでひとり暮らしを支えることになるんですね」という確認はしましたか？

Wさん しました。

奥川 その費用については？

Wさん 必要になりそうな金額の提示はしたのですが、お金の出所までははっきりしませんでした。「Gさんのお金があるから」ともおっしゃっていました。

奥川 誰を連絡先にするかは決めましたか？

Wさん はい。窓口はJさんになりました。

奥川 ちゃんとやっているじゃないですか(笑)。Wさんは意識しないで援助の組み立てをしているんです。ただ、まだ自分の実践を言葉にできないのですね。そこがこれからの課題です。

Wさん はい、わかりました。

奥川 18年11月7日にある程度は仕切り直しをした。そうすると、今後、ご主人の病状が回復したときに、キーパーソンが誰になるかですね。

Wさん 私はご主人が再びキーパーソンになると思います。ただ、ご主人は在宅には戻らないとおっしゃっていて、将来的にはGさんも有料老人ホームに入るという方向性でご家族のなかでは話が進んでいるようです。

奥川 Gさんの意向は聞いていますか？

Wさん はい。Gさんはご自分の家にこだわっておられたので、有料ホームの話聞いた後、ご本人のお気持ちを伺いました。すると、「夫婦で暮らせればどこでもいいのかもしれない」とおっし

やったんです。私は、Gさんの気持ちがどこで変わったのかわからなくて、戸惑いました。

奥川 Gさんが自分の家にこだわっていたのは、どういう理由からだのとらえていますか？

Wさん ご両親が持っていた家だから、と思っていたのですが……。

奥川 どうもそうではないみたいですね。Gさんは「主人の世話はできます。ごはんもつくれます。台所にも立てます。家にいたい。夫は戻ってくるのかしら。夫と一緒に暮らしたい」とおっしゃっていますよね。

Wさん そうか——。ご主人と暮らすことが第一だったんですね。それでご主人が病院を出て有料ホームに入ったと聞いたとき、「そこまで家にこだわらなくてもいいのかしらね」とおっしゃったんですね。

奥川 大事なところに気づきましたね。Gさんの家へのこだわりの裏には、あくまでもご主人と一緒にいたいという気持ちがあったんですね。いま現在は何か問題はあるのですか？

Wさん とりあえず今は落ち着いています。ヘルパーも定期的にかなりの数が入っていますし、ご本人の様子もひどく混乱することはありません。ご主人のところへはJさんが定期的に連れて行ってくださっています。

奥川 Jさんはインフォーマル資源としての役割をきちんと果たしてくださっているんですね。

Wさん はい。

クライアントの 「生きている世界」で考える

奥川 では、時間も迫ってきましたので、今日の課題について振り返っていきましょう。まず、一つめの課題、どうすればGさんの拒否を突破することができたのか。この点はどうですか？

Wさん 引き継ぎ時の確認をしっかりすること、訪問の際にGさんと信頼関係を結べていれ

ば、突破できたような気がします。

奥川 そうですね。引き継ぎをきちんと行うためには、もう一回基本に戻ってアセスメントの枠組みを確認することが大切です。また、信頼関係を結ぶためにも、相手の自己評価を上げるための一言を惜しまないことが重要です。

Wさん はい。勉強になりました。

奥川 2番目の課題、「二面性のある利用者への対応」はいかがですか？

Wさん 二面性ではありませんでした。

奥川 そうですね。では、なぜGさんは二面性ともとれるような反応をしたのだと思いますか？

Gさんのリアリティ、Gさんの生きている世界から考えてみると、どうでしょう。

Wさん Gさんとしては、自分と夫の生活を守りたい。一緒に暮らしていきたい——。

奥川 でも、現実にはGさんの対処能力は落ちてきています。

Wさん だから、周りから助けてもらいたい……。

奥川 そう。Gさんの生きている世界で考えると、ヘルパーに対してはJさんのことが信用できないと言い、Jさんに対してはヘルパーの文句を言うのは、「だから、あなたは私の味方になってね」というメッセージなんです。つまり、Gさんの不安が根底にあるがゆえの言葉なんですよ。

Wさん たしかに——。よくわかりました。

奥川 3番目の課題は先ほど検討しましたね。では、今日の感想をどうぞ。

Wさん とても疲れました(笑)。自分のふがいなさを露呈するようで情けない気持ちでいっぱいなのですが、ここで得たことはこれからの仕事に絶対に生かしていきたいと思います。Gさんご夫婦の援助についても、今日の話をふまえたうえで、今後どうしていくべきかを考えたいと思います。今日はありがとうございました。

※実際の検討会では、アセスメントの枠組みやコミュニケーション技術などについて、奥川氏が随時解説を行っています。